

〈翻 訳〉

## 戦争はないが衝突が絶えない時代としての平和

——2007年広島修道大学夏期集中講義「ヨーロッパの  
現代芸術」—— シュテファン・ミッツラフ——

日本語訳 森 島 吉 美

(受付 2008年10月29日)

はじめに —訳者まえがき

2007年の夏、外国人客員教授として広島修道大学に招かれたシュテファン・ミッツラフ氏 (Stefan Mitzlaff) は、「ヨーロッパの現代芸術」と題して夏期集中講義を行った。

シュテファン・ミッツラフ氏はドイツ・カッセル市在住の画家であり、その芸術活動のメインテーマは「戦争と市民生活」である。また、氏は何度かの中断はあるものの、旧西ドイツ、旧東ドイツ、旧ソ連、アメリカなどで社会学あるいは精神医学分野を担当する教授職を務め、最近までカッセル大学でデザイン学を教えていた。

ミッツラフ氏が暮らすカッセル市では、第二次大戦以降、5年に1度、「ドキュメンタ」と銘打つ世界現代美術展が定期的開催されており、2007年で12回目を数えた。世界現代美術展「ドキュメンタ」は、第二次大戦の反省を踏まえ、若き芸術家の想像力が拓いていくであろう未来に期待をかけ、平和の新しいあり方の創造に挑戦する芸術家を育成することを目的としてきた。その美術展を草創期からつぶさに見てきたミッツラフ氏が、芸術活動を通じて広島の若者に「平和のメッセージ」を伝えた。広島滞在中、氏は、広島市立現代美術館で、自らの個展を開くと同時に、広島修道大学の学生に集中講義を行った。

ミッツラフ氏は、2005年、2006年の両年度、広島修道大学総合研究所調査研究プロジェクト「〈男の論理〉の向こうの平和を求めて」(研究代表者：森島)の共同研究者でもあった。この調査プロジェクトの一環として2006年、ドイツにおいてはカッセル市のヴィルヘルムギムナジウムの芸術専攻の高校生、中国においては西安美術学院附属高校の生徒、日本においては広島修道大学の美術部の学生、広島市立大学、比治山大学の芸術学部の学生等呼びかけて「戦争はないが、衝突が絶えない時代としての平和」というテーマで絵画をはじめとする芸術作品を募集した。その募集に応じて出品された作品を人々に紹介するための「日・中・独青少年平和絵画展」を、2006年10月にカッセル市役所で、2007年3月には、西安美術学院

付属展示ホールで開催した。そして、2007年7月29日～8月12日に広島市立現代美術館で開催する運びとなった。まさに、世界を駆け巡る「移動平和展覧会」といえよう。

今回のわれわれの企画の目的とするところは、「毎年繰り返される定例の儀式」によって単なる「過去の物語」へと回収されてしまいがちな8月6日を、「今、この場」に取り戻すことであった<sup>1</sup>。

さて、講義は二つの部分からなる。統一テーマは、「戦争はないが衝突が絶えない時代としての平和」である。前半は、彼自身が画家でもあることから、芸術家の現実に対する視点をテーマにした、「新しい眼（視点）を持つこと（養うこと）」、後半は、平和問題に具体的に突っ込んだ形で、「平和—戦争はないが衝突が絶えない時代」となっている。

以下、講義の原稿を森島が翻訳する（原稿のままで伝わりにくいと判断したところは訳者が説明を加えている）。



写真 3

1 〈写真3〉集中講義受講者とその成果として発表した共同制作、〈写真4〉ミッツラフ氏の作品

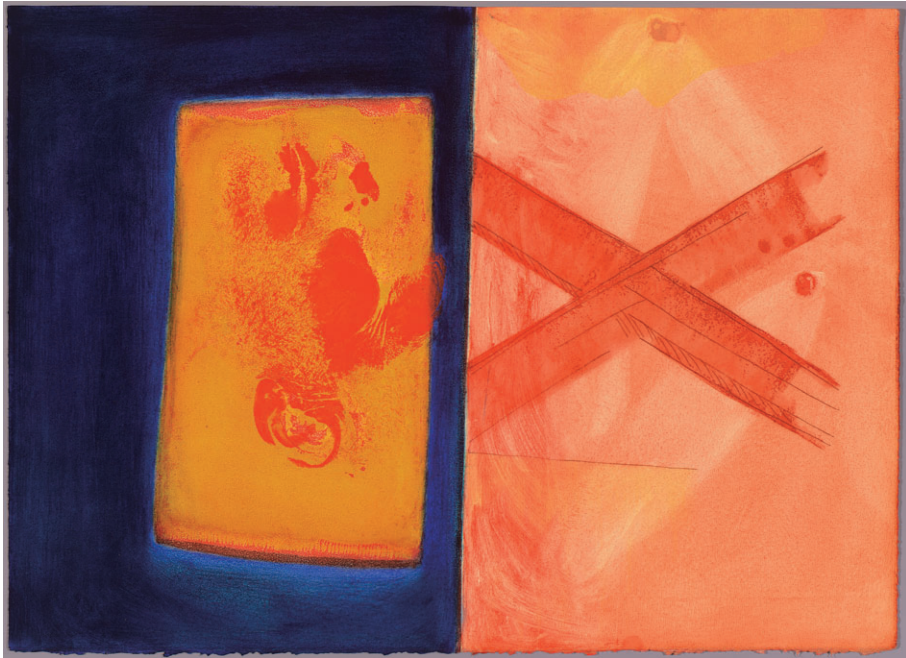


写真4

## 第一部 新しい眼を持つ（養う）こと

### 「文化」と「個人」の間の揺れ動き

他の動物と違って人間は、生きていくことによって自らの行為をコントロールする本能をほとんど持ち合わせていない。何が正しいのか、何が彼にとっていいことなのか、何が彼を生きのびさせるのか、自身でその規則を見つけ出さなければならない。これが、つまり、一番広い意味での「文化」というものである。生まれつきの本能の欠落（生物学的遺伝の欠落）は、それはそれで長所もある。人間は、他の動物よりは、特定の気象学的地域や特定の「生き方」に縛られることが少ない。

二つ目の相違点は、我々人間は、「個人」という概念を、つまり「私」というものを持っている。簡単に言えば、「文化」と「私」の間に、我々が所有し、引き受けている（引き受けなければならない）役割というものがある。時にはそれを願うこともあり（会社の社長など）、又、それから逃げたくもなる役割（囚人など）もある。あるいはそれを変化したい役割（職場への決定権の参与、戦争や平和時の女性の権利、都市での市民の権利と義務等）もある。

都市での公共生活における「文化」と「個人」の関係でいえば、例えば、宗教（特定の宗

派への所属), 労働時間と休暇, 家族と近所, 等々がある。

ここにひとつの具体例をあげる。1989年までは、サラエボ(旧ユーゴスラビア)においては、一方では、宗教に関心のない人々、他方では、カトリック信者、イスラム教徒、ユダヤ人が家族ごと横断的に彼らの文化を作り上げ、同時に宗教の違いを乗り越えた混合的職場組織、学校、ダンスレッスン場を持っていた。(サラエボは)まさにヨーロッパ的都市であった。その後戦争が勃発(1992~95 ボスニア・ヘルツェゴビナ紛争)した。今までの多様性が「不潔(民族浄化<sup>2</sup>の名のもと)」と声高に叫ばれ、(その場から)逃げる事ができた人は逃げ去り、多くの人は殺され、生きのびた人は、人種、宗教によって分断されていった。文化的に見れば、「都市」が「村」に変身してしまった。

「文化」と「個人」間のゆれ動きを示すのに、長い歴史の経過の中で、法律、哲学、心理学等が様々のたくさんの具体例を提供してくれる。

- 1 特許権, 著作権, 版權
- 2 「自分の幸福は自分で作るという理想」にいたるまでの「自己実現」という概念、当然そこには、個々人が「悪者」になることもある。
- 3 独自の意味ある世界、宗教等の扇動者としての天才
- 4 一方において、人間社会、規則、役割があり、他方、「個人の感性」と呼びうるものがある。例えば、何が美しいのか、何がいいのか、悪いのか、何が正しいのか、間違いか判断する。この両者の間の揺れ動き。

新しいもの、異種のものへの反応—うそつく、見てみぬ振りをする

個人は、単に「慣習的」であるのではなく、又単に「集団的」であるだけでなく、「創意」に富み、「独創的」であり、また、そうあるべきである、というのが「西洋的文化」と呼ぶるものである。

そしてこの我々の文化は、(他の文化もまた)、唯一の真実、ただ一つの正義を代表していると主張する。結果、あらゆる選択肢(自分以外の文化、自分の外にある文化)が容易に、脅威、雑音として体験され、「生の流動(自らの生を生き生きとさせてくれるもの)」、あるいは「ヨーロッパ的多様性」としてよりは、むしろ衝撃として体験される。1989年のサラエボの例を見ればよくわかる。

「浄化」という概念、1933年から45年までのヒットラー政権下において、外国語が排斥された「ドイツ語」、ソビエトのスターリン政権下の「清潔な(浄化された)音楽」、過去何世紀にわたる生物学的人種差別、ドイツの地獄の体験でもあるヨーロッパにおけるユダヤ人殺害、

---

2 訳注 Ethnic cleansing (エスニック・クレンジング) の訳

あるいは、都市建設、秩序ある服装、正しい学校、食事のマナー、一体その際の「秩序（浄化）」とは何を意味するのか？

（「個人」と「文化」の間の）揺れ動き、そしてその変化の問いかけに、人間生活のあらゆる分野が遭遇してきた。学校、食事、建築、都市計画、化学、文学、芸術、等々。

変化を前にして、その変化に興味あるものとしてよりは、脅威に感じるときは、その変化に対して自分を守ることができる。ここで私は、「怒れる父」や警察のことだけをいっているのではない（真っ向から新しいもの、新しい動きに抵抗する）。「うそをつく」、「見てみぬ振りをする」こともそれに属する。これは、ある種の自己矛盾を含んだリアクションである。このリアクションは、あまりにも「刺激がありすぎるもの」からわが身を守り、自らを「秩序付ける」ことを助け、「内的安全を保つ」ことを助ける。それは目の前のものを見えなくさせてくれる。

「わからない幸福より、よくよく知っている不幸の方がまし」ということだ。

ある葉の「副作用」、自動車生産の「副作用」、軍隊出動の「副作用」という「すばらしい」概念が、この「見てみぬ振り」の格好の例である。

#### 緩やかな考え

慣習、伝統は重要である、しかしそれらが多すぎれば危険なものである。

我々は、この「慣習」と「自由」の間に立っていると見える。我々が、親であろうが、近所の人間であろうが、肉屋であろうが、法律家であろうが政治家であろうが同じこと、我々は、例えていえば、今ある「問題」へのまったく新たな解答を求めている。あるいはこうも見える。我々は新しい「問題」を発見した、と。19世紀の病院の衛生環境について考えてみればいい、あるいは、「戦争がないが衝突が絶えない時代」という、この「（平和に関する）問題のとらえ方」を考えてみればいい。

ウイーンの医者ゼンメルヴェイス<sup>3</sup>は、「分娩の前に手を洗おう（塩素水で）」という、最初は「おろかなこと」とののしられた提案で、乳児の死亡率を30%以上からその半分にまで押し下げた。同じように日常の生活常識になじまないのが、政治世界における上の平和に関する考え方である。この際、何が必要なのか、そこで、「より緩やかな考え」がどんな役割を演じるのか？物事を根拠づけたり、人々に理解を求めたり、尽力し、人を助けることが最大限に大事にされる領域においてこの「より緩やかな考え」とは何を意味するのか？

ある化学者が、あるデザイナーと共同で、大量のエネルギーを浪費する冷却システムを拒否し、しかもそれでいて、生鮮食品の店、そして家庭において保存される食物の品質を以前

3 Semmelweis, Ignaz Philipp (1818~1865) 彼は産褥熱の原因を究明し、医者、病院で働く人に対して初めて衛生規律を導入した。

と比べてよりよく保つことができる全く新しい方法を見つけ出したとしよう。そうすれば、冷蔵庫産業は壊滅的打撃を受け、商店、住居は今までと一転する変化を被ることになる。「一度に全て」、ことはそう運ぶものではない。化学者とデザイナーは、自らの新しいアイデアを悲しげに見つめるだけで、地震でも待つより他にない。そうすれば、古い、今まであった条件にとらわれることなく全てを最初からはじめられるから。「全く最初からやり直す」、こんなことはめったにないことであり、たいていは地獄である。

もっといいのは、彼らの「新しいものの見方」に合致するようなあるものが生まれてくる、そのような状況を待つことであり、そのような状況を作り出すことである。例えば、それが、建築構想の変化だったり、エネルギー論争だったり、EU のエネルギー節約の研究プロジェクトであったりする。つまりは、「彼らは、いわゆる今ある文化に首までどっぷりつかりながらも、しかし、頭一つを水面から上に出し続ける」ことである。

この際、かれらは、既に頭の中で出来上がった作品をもってじっとしているのではなく、まずは注意深い実践の中で認識されうる、そして、まだ誰も予測しえない問題を考える機会を持つ事になる。彼らの「チーム」は変化する（その都度直面する問題に、その都度一緒に考える仲間を求める）。「スター」、「聖なるアイデア」の代わりに「グループ」、「プロセス（過程）」が大事である。

### 美学者と芸術家

目的は、何か新しいこと（もの）を作り出すのではなく、何かある特定のものを動きあるものに移すことである（動かすことである）。

既に存在する思考方法とは「違い」、その限界を「超えた」他の視点、解決方法を見出す心積もり、これは「保守的であり進歩的」なものである。

一つのシステム（例えば人間）は、何らかの変化をし、そして何らかの方法で同じように留まるとき、それだけ容易に生に留まり、生き続けることができる。

例えば、一人の女と一人の男が結婚し、子どもを産む。そして20年後？（その間に同じものとして留まるものもあれば、変化するものもある）。あるいは、一方では、大戦後、カッセルやハンブルグのような壊滅した町における建設、他方では、2000年、その町に新たに何が求められているか？あるいは、上の二つを一緒にして、2000年の住宅に今日若い夫婦が引越しをし、20年後には、その家に対して、まったく違う必要性が生まれる。例えば、事務所、車椅子、客間、もっと小さい空間。一つのテーマに違った視点！

一つのスタイルの内部で、一つの「正しさ」の枠内で考え、何かをする人を「美学者（Ästhetiker）」と呼ぶ。彼らは、「美しくて、正しい」、みんなに認められていることをやる。それらは、いってみれば、親しみやすく、ひとつのシステムの中で必要な堅固な要素であ

る。例えば、家庭、道具、法律などがそれにあたる。

もう一方は、変化に積極的理由を見出す人で、一番広い意味で、「芸術家 (Künstler)」である。彼らは新しいパースペクティブをもたらす。

絵画の世界から例を一つ出すと、パブロ・ピカソ<sup>4</sup>である。パブロ・ピカソはヨーロッパ文化の視点からいえば「芸術的作品」の創造者であった。彼は全く「新しい眼」を持っていた。わたしが9歳の頃学校では「(ピカソなんて) 間抜けなやつ」「あんなものは誰だって描ける」といわれていた。一方では、私の家族の友人たちは胸を張って私をピカソ展覧会に連れて行ってくれた。そして徐々に、彼の作品は市民の美的センスに受け入れられていった。今日では、彼の作品は「重要」であり、「美しい」、「特に秀でている」といわれる。

同じような歩みをしてきたのが、ドイツ (カッセル) に初めてできた歩行者天国<sup>5</sup>である。最初は「邪魔」になる、「意味がない」、「これは何だ」と非難されたが、最後には、「これはすばらしい」に変わっていった。

この芸術的思考方法を全ての分野で育てていくことは、単にいいことに留まらず、死活的に大事なことである。学校や、政府の財務省において、今日、明日の「利益」のためにこれをないがしろにはいけない。

北極や南極の水が融けたらどうするのか？ 淡水がほとんどなくなっていったらどうするのか？ 軍隊が市民を壊滅させたらどうするのか？

精神病院を、ヒトがヒトを扱う施設に変えていったのがいい例である。このことの詳細に関しては別途又述べる<sup>6</sup>。

別の例を出す。本線から離れて支線として田舎を走っているある鉄道はほとんど乗客がいなかった。山賊という危険性がかなり高かったためだ。最初、鉄道公安と連邦国境守備隊が乗り込んだ。それはコストが高く又成功をもたらさなかった (乗客は増えなかった)。乗車賃、チケットを格安にすると初めて、田舎の人々は、車から鉄道に乗り換え、大きな町に仕事や買い物に行くようになり、列車はいつも満員で、そのため、安全に走行できるようになった。この支線はいい商売になった。

「古いものへの固執 (Altgierig)」より「新しいものへの好奇の眼 (Neugierig)」を持つこと。そして、「一度に全てを」という考えは錯角であり悪い結果を招くものである。

平和とは戦争がない状態という考えから、衝突に満ちた時代としての平和

ある行為とその結果がわかるまでの時間がより長ければ長いほどその結果は悪くなる。産

4 Pablo Ruiz y Picasso (1881~1973) (〈写真6〉グランド世界美術第23巻、講談社、1974年)

5 戦後1953年11月、公的な最初の歩行者天国が Kassel にできた。

6 本論文13ページを参照

業化（産業革命以降の）に関して、遅すぎる嫌いはあるが、この問題を我々は抱えている。迅速な「すばらしい」行為と長い期間の後のその結果、その結果は遅くにやってくる、その時には取り返しがつかなくなっているものだ。

例えば、抗生物質の導入（フレミング、1928年、ペニシリン<sup>7</sup>）がそれであり、可燃性燃料を使う動力の導入（1890年）がそれである（環境汚染）。

「芸術的行為」、芸術的思考が抱える危険は、そのぎりぎりのところで押さえられるものである。確かに人間の体質というのは、何百年の年月を重ねて発展してきたものである。今世紀の迅速な変化にはついていけない。しかし、文化、慣習、制度、仕事は、あらゆる危険をその限界のところで押さえる可能性を備えているものである。「平和研究（平和学）」が長きにわたって見出した（衝突回避のための）複雑な構造のシミュレーション、あるいは、近距離交通システムの計画・設計（例えば、マイカー通勤から公共交通機関の利用へ）を見ればそれがよくわかる。

「平和研究（平和学）」というのは、別の観点から興味ある事例である。それは、衝突の問題を新しく定義しているところである。それは、単に哲学的定義に留まらず、実際に、コストがかかり、血を伴う錯誤からの回避を理由付けている。「問題解決のためにいつでもスタンバイできている」という軍隊の主張を、多くの人々はいまだに信じている。

トーマス・クーン（科学史家）<sup>8</sup>は、1960年に、科学の発展において、その目的、方法における革新的変化は、いつもその科学の外にいるアウトサイダーによって引き起こされてきた、と書いている。平和運動しかり、ガリレオ・ガリレイ<sup>9</sup>しかりである。ガリレオは、当時地位ある学者たちがそうであったような宗教的哲学者ではなかった。頭の切れる手工業者であり、我々が今日「物理」と呼んでいるあらゆる諸問題を発見した革命家であった。

「平和研究」も、軍隊から新しく枝分かれしたのではなく、世にはじめて、「衝突とともに生き」、「勝利」の代わりに「平和」という問を投げかける。

## 第二部 平和一戦争がないが衝突の絶えない時代

歴史は、「なにか新しいことを学ぶ」ために利用されてきたのか？

今日は日曜日だから、あるいは追悼記念日だから平和だ、そして月曜日から「日常世界の戦争」に戻る、といったことをここで問題にしようというのではない。平和に関して話すと

7 Alexander Fleming (1981~1955), 1929年ペニシリンを発見、ペニシリンショックという副作用はよく知られている

8 Thomas Samuel Kuhn (1922~1996)

9 Galileo Galilei (1564~1642)



きは、永きにわたって続く平和が問題になっているということである。そしてその時の平和は、何も我々の「内」だけで有効な平和ではない。

「永続」と「内」とは何か？「永続」とは、初めから決められた状態を、保障された道を通して獲得するといった類の「最終的解決（特にナチ政権下におけるヒトラーにおけるユダヤ人問題の最終解決案、すなわちヨーロッパにおけるユダヤ人絶滅計画）」のようなものを意味するのではない。

「内」とは何を意味するのか？我々が学校で習った境界（大きくなったり、小さくなったりする王国、国家の国境、町と町の境界、家の周りの垣根）、こういった境界は、この「衝突」といったテーマに関しては今までに役に立ったこともなければ、今日においてはまったくといっていいほど意味を成さなくなっている。せいぜい、サッカーのフィールド、水族館の水槽に関しては使われようが。戦争と平和の構造に関して述べる際、それらはなんら意味を持つものではないし、あまりにも薄っぺらな概念過ぎる。

「平和」という概念の一面は、なるほど、日本やドイツといった、我々の国、文化を意味する。その「内」で諸々の衝突が平和的にコントロールされまたされるべきである。他方で、その境界を越えた「一つの世界」を意味しもある。いろいろの文化の間で、あるいは我々を取り囲むさまざまな国々の間での平和。

文化間の相違が明らかに存在する。何が正しくて、何が間違いなのか、何がいいことであり、何が悪いことなのか、何が役に立ち、何が害になるのか？それぞれの文化の中で異なった判断がなされている。例えば、「死刑」、「正当な戦争」が一方にあれば、他方には、「（死刑は）殺人」、「（正当な戦争を叫ぶ人は）悪い敵」が対立する。あるいは、16歳で結婚し、子どもを得る人もいれば、自らのキャリアをつみ、35歳にして結婚し、家族を作る人もいる。そのときには、同じ年の隣人は既におばあちゃんになっていることもある。

今一度文化の相違について述べたい。どういった事柄に意味があるとされるのか、どういった事柄が問題として認識されるのか、あるいは、どういった事柄が問題として認識されないのか？その結果として何が生じるのか？何が「成功」、「不成功」と解されるのか？勝利した戦争が成功であり、負けた戦争は、次は負けなためにもっと武装しなければという理由になるのか？

1933年から45年までヒトラーの元で宣伝相を勤めたヨセフ・ゲッペルス<sup>10</sup>は、1944年（敗戦間じかに）に、「ドイツ人は時間がたてば、＜誇りと喜びに満ちて＞死者と廃墟の傍らを闊歩することであろう」と述べている。

同じようなコメントは、ドイツや日本において何十万の市民を殺害した後の英国やアメリカ

---

10 Paul Joseph Goebbels (1897~1945)

カサイドから出されているし、又、イスラムのテロリストの、彼らが募集した自爆テロリストへの約束がそれである。

「栄光ある」あるいは「(その中味については一切問われることがない)沈黙の」歴史とのかかわり、例えば、1915年から16年にかけてのアルメニアに対するトルコのかかわり<sup>11</sup>、1937年以降の日本と中国の関係、1940年以降のフランス<sup>12</sup>。

歴史とのかかわりにおいて、何が気づかれ、何が気づかれなかったのか、そして「歴史」は、ただ見て見ぬ振りをするに役に立ってきたのか、装飾的思考(栄光の歴史、強き勝者の歴史、等々)のために寄与してきたのか、あるいは、歴史は、又「新しいことを学ぶ」ために利用されてきたのか？

### 「進歩」という概念

ここで、「国家とインターナショナル(超国家)」のテーマとその構造における重要な問題点を挙げる。

「テーマ」としては、<気候と環境>、<子ども、男と女の寿命>、<南北問題>、<人口増加と人口減少>、<病気と伝染病>、<麻薬製造者、麻薬市場、麻薬消費者>、<武器商人>、<人身売買>、<テロ>などがすぐに浮かんでくる。

「構造」としては、問題を定義するのは誰か？ どういった問題が(その問題を解決するための)専門化された研究施設を持っているのか？ いかにしてテーマとその答えが決定されているのか？ 当事者(例：市民)や決定者の権限は？ 情報源に関してどういった情報が誰に開かれているのか？ 国家の役割とその管理？ NGOの役割？ 資金？

「テーマ」と「構造」とは別に、「新しいこと」を考える際、今まであった「古い思考」との関係性を完全に断ち切ってしまうことが今までに幾度もあった。これはしばしばカタストロフィーを招くものである。例えば、広島、長崎の「原爆」、ベルリン、カッセルの「市民をターゲットにした空爆」、チェルノビルの「原発」<sup>13</sup>がそうである。

構造的に変化する経験、教義を手に入れるためにはカタストロフィーが必要なのだろうか？ インド(ガンディー：非暴力・無抵抗主義)や南アフリカ(ネルソン・マンデラ<sup>14</sup>：体制変化のためには何十万の犠牲者が出るのではと思われていた)は例外で留まるのだろうか？

11 1915年から始まったトルコによるキリスト教徒アルメニア人大虐殺

12 1954～62年にかけてのアルジェリアのフランスからの独立戦争、等々

13 ドイツ政府は1986年に崩壊したチェルノビル原子炉施設に多額の支援を続けている。この援助は、施設をセメントとスチールで覆うという「豪華な棺」と呼ばれているもののためである。いまだに放射線(プルトニウム)を放出し続けていることはよく知られている。プルトニウムの半減期は約25000年といわれている。我々にできることは、上の装置で「待つ」ことのみである。

14 Nelson Rolihlahla Mandela (1918～) 1994年4月、南ア史上初の全人種参加選挙が行われ、マンデラが大統領になった

問題は、戦争や「不幸な出来事」に関しては多くが語られ、平和について、又「比較的」な平安に関してはほとんど語られることがない、ということである。ここにまれな例として、“Neue Zürcher Zeitung”の2007年7月23日の記事に次のようなものがある。「パレスティナにおける崩壊とチャンス<sup>15</sup>」。

「古い思考」と「古いめがね」は、ヨーロッパにおいて、19世紀の初期から特別な形態をおびてきた。すなわち、「進歩」と「何でも思い通りになる」という形態を。思い通りになるものは進歩であり、進歩とはいいことである、という思考。進歩はすばらしい、なぜなら全てがよりよくなるから。進歩とはよりすばらしいものであり、人間にとってよりすばらしいものは進歩である、という考え。うまくいかなかったら、その人は物事を間違っていることになり、間違いを犯していることになる。彼は馬鹿であり、少数派に脱落する。黒人、外国人、貧しい女性、障害者がそれである。

人類の（人種的）階級分け（一等種、2等種）、「悪」人の「でっち上げ」（外国人、家庭のない女性、ユダヤ人、兵役拒否者、ハワイに対する日本人、等々）が、19世紀以来、進歩という尺度の出現であまりにも貧弱な学問に成り下がった化学、生物学、経済学と並ぶ、一つの「学問」になった。

#### 「古き思考」から、その殻を破る—グラフィック、絵画の課題

既に述べたように、誰が何を決定するのか？何が目的なのか？「問題」とは何なのか？

それぞれの文化の中で、何が進歩なのか、何が思い通りになしうるのかにおいて、大きな違いがある。衝突を解決するための答えとして、軍隊と結びついた今までの考え方、グローバルな視点を欠いたものの見方が根強く残っている一方、目の前の諸問題は、われわれの今あるものの見方、あるいは諸問題を解決する今ある手段ではどうにもならなくなってきている。兵隊はソーシャルワーカーでもなければ料理人でもないのだから。

たとえヨーロッパが（あるいは世界の他の地域でもいいのだが）自らを「世界」と理解したとしても、「戦争はないが衝突が絶えない時代」にとって、進歩とは、保障された処方箋でもなければ、固定した道でもないし、安全が確保された高速道路でもなく、「絶え間ない発展の過程」（これに関しては又後ほど述べる）であり、それを「どう思い通りに使う」かは、場所によって、国によって、又どんな文化を持っているかによって異なるものである。

多くの文化にとって共通しているのは、重要な核心的問題の答は人間を超えたところに押しやられている（神々、宗教）という事実である。

15 ここで述べられている中心的課題は、イスラエル、パレスティナ両サイドにおける「平和・衝突問題」の理解者で且つ体制反対派に関する情報が決定的に不足している、という点である。世界中で読まれている有名な新聞においても、又、政府筋からも。

聖書やコーランを見ればよい、そこには、全ての問題に一つの答が、そしてその答を全ての人が喜んで求める。それは、長い歴史の中で作られた(人の目を曇らせる)「雲」であって、その「雲」の中に責任というものが消滅していった。三つの一神教、キリスト教、ユダヤ教、イスラム教はその数ある例の典型である。

程度の差こそあれ、グローバルな要求をかざす「救済の教義」、例えば、1933年から45年にかけてのドイツ、1918年から89年にかけてのソ連、あるいは又、アメリカの「自由」のための戦争政治、等々がそれだ。

「平和政治」が意味するところは、まず、目の前の衝突を、責任を持って見続けること、全ての当事者が事に当たること、100%の解答を約束し、期待するのではなく、衝突を暴力行為なくして和らげること、すなわち、「耐えざる経過、プロセス」としてみることである。

危険の核心は、もはや何の問題も存在しない100%の最終解決を憧れることの中にある。この憧れは、暴力による脅威が大きければ大きいほど高くなり、他の方法による解決手段(新聞、学校、研究)に対する認識が不足し、経験が不足していればいるほど、大きくなる。そして、専門的知識という意味での手段、組織、財政が暴力(軍隊、産業、職業)と強く結びついていけばいるほど、高くなる。

暴力行為の「よき」前提とは、それが全大陸にまたがるものでも、一つの国においても、あるいは家庭においても、貧困、内、外部における分裂、対極化の乱用である。ヨーロッパ中心主義の思い上がりそれがであり、家庭の成功を妨げる「できの悪い子ども」がそれである。最低賃金の元で非合法的に働くか、「志願兵」になるか、その選択の前に立たされた貧しい人、難民、あるいは、罰による配慮しか与えられない、望まれて生まれてこなかった子どもたちがそれである。まさに、暴力による自己同一性の強制である。

わたしが、「ユートピア」という言葉で、意味がありうる、しかし決して手に入らない状態を言い表すとき、それは次のようなことをいっているのである。平和構造の前提としての文明世界の目的は、暴力、戦争、困窮、排斥、抑圧からの防衛であり、暴力の上に築かれない自己同一性の喪失からの防衛であり、この喪失者の心理療法がそれである(ハンブルグエッペンドルフの大学病院<sup>16</sup>が正にそうである)。

この反対の前提となるものは、経済危機、大量失業、人種差別、そして、将来に対する不安、犯罪である。

これらの危機への認知度、認識度が上昇すると—これが積極的変換への第一歩であるのだが—二つのことが、たいていはこの両者が同時に、おこる。

一つは、この危機が客観的に目に見えて明らかになり、このままやり過ごすことが危うく

---

16 この病院には、特に、中近東、極東アジア、アフリカからの拷問、戦争犠牲者の、入院、あるいは通院による心理療法科がある。

なってくる。たとえば、19世紀のヨーロッパにおいて、子どもの労働が下層階級の寿命を縮め、貧しい人々は子どもを産めなくなってきた。そこで、全ての子どものために保育園と学校が導入された。二つ目は、認知度、認識度が幸いなことに充分に上昇し、例えば、「女性解放運動」、「平和運動組織」、子どもの保護、環境保護運動が出現する。今まで言葉でいい表すことができなかつたものへの言葉、名前、シンボルが発見される（女性解放運動、1960年代のアフリカ黒人運動〈Black is beautiful〉）。

それゆえ平和運動は重要である。それは一朝一夕にはいかない。事実を収集し、言葉とシンボルを見つけ出し、公にしていき、誤解されないようにし、目的を定義する。必要性が意識の中に生まれなければならない。今までの限界を超えるための言葉とシンボル。（これは、悪い意味での権力手段にも利用されてきたのだが）。言葉、絵、テキスト、詩、マンガ、ポスターといったものは、あらゆる面において重要な手段である。単に嘘をつくためだけではなく、認知度を広げるためにも、今ある思考の限界線を消し去るためにも、そして、新しい目標のためにも。グラフィック、芸術の課題である。

平和の象徴である鳩を描いたり、ピカソのゲルニカの絵を出版すること以上のことをいっていることはわかっていただけだと思う。

1943年のカッセルの写真<sup>17</sup>、1945年の広島、長崎の写真、朝鮮半島の写真、ベトナム、南アメリカ、アフガニスタン、ユーゴスラビアの写真、イラクの写真が、単にショック、あるいは暗い（憂鬱な）会話を提供するだけでなく、明日にもテレビや新聞でもっとそれに関して多くのことが語られるといった風に使われるようにできないだろうか？

あるいは、それは、心温かい記念碑のために、あるいは「既に過ぎ去った」、「遠く」の出来事に関する悲しみを表す書物に使われてきたために、ここでは（新しい思考の扉を開くためには）ふさわしくない手段なのだろうか？あるいは、その当時から今日まで続いているといった具合にそれらの写真を今日に関連付けることができないだろうか？ どういったシンボルがどの国でふさわしいのか？

### 「新しい問題」への「認知度」

衝突が問題となるのであって、その完全な解決を問題にしているのではなく、それを和らげることが大事なのである。その衝突をいかに制御するか、いかにその衝突間の仲介者になるかが問題である。しかし、一方では、戦争という手段で得られる恐ろしいばかりの勝利が問題とされる。このとき二つの大きな損失があることに気づくことが大事である。すなわち、生命、命の大切さ、そして、その戦争で一切得るもののない人々の発言力。何より市民の犠

---

17 〈写真5〉 Werner Dettmar; Die Zerstörung Kassels im Oktober 1943, Hesse GmbH und Autor, 1983

牲、そしてその戦争が引き起こされたときの当初の目的がいつの間にか消えていること。いま一つの損失は、金、組織、条約、教育の中味の損失である。

このテーマを「認知」するだけでも、あまり知らない国へ重い荷物を背負って旅行するようなものである。そして、その国の文化的、政治的、歴史的状況によってその困難さはさまざまである（持っていく荷物がどんどん大きくなる）。

ここに、「文化的変化」を示す別の例を挙げる。

長い間、ドイツにおいて、精神的に病んできた人々の生活は、20世紀の70年代まで話にならないほどひどいものであった。「頭がいい」、弱い身体を持った身体障害者は家に閉じ込められるか、われわれが「病院」と呼んでいる「非人道的場」に閉じ込められてきた。このテーマを「テーマ」とするのに多くの年月を必要とした。私自身がそうしたように彼らに助けの手を伸ばすだけでなく、そうすることが我々にとってどれだけ手に入れるものが多いかという事実気づくまでに20年を要した。ともかく、我々には初めから目的があった（たとえ、その間、難しい問題が出現してもやめるわけにはいかなかった）。そのテーマが全く新しいものであったため、20年の間、何を具体的になすべきか、我々は学んできた。多くの「問い」、多くの「なすべきこと」、「教育」、「財政的支援」の方法は全く新しいものであり、誰も前もって明確にいいえるものはいなかった。

具体的実践において着実に歩を進めていくために、我々は、「戦争がないが衝突が絶えない時代としての平和」という「テーマ」を必要とし、その必要性をできるだけ多くの人々に訴え、みんなで分かち持たなければならない。そのための前提として、上の「認知」がどうしても欠かすことができない。

#### 「衝突」に立ち向かう「新しい」試み

暴力は破壊を生み、多くの場合、それが目的になる。しばしば「すばらしい正しい目的」に到達するという主張と結びついている。しかし、暴力は、エネルギーの大量消費と結びつき、生命、魂、教育、金、そして古い歴史を根こそぎ奪い取る（ユダヤ人、朝鮮半島の人々を見ればわかる）。

暴力は又その結果として、我々の眼をほとんど、ただその暴力に関与した人々のみに向けさせる。例えば、イスラエル政府、パレスティナの過激派のみに眼をやることになり、両国の犠牲者の積極的な、あるいは受動的、絶望的な抵抗には目もくれない。そして暴力がもたらす結果として、両者の脅しから逃れるために、人々は両者のどちらか一方に与するか、あるいは沈黙するか、その選択を迫られる。

もっと劇的なのは、その前線に立つ人々が交代したときである。アメリカのかつての「友人」は今や「テロリスト」である。彼らはずっと「悪者」であったのだが。何十万の死者を

出した50年代、60年代のフランスのアルジェリア戦争もその例の一つである（哲学者アルベール・カミュの警告と平和への提言を参照<sup>18</sup>）。

苦悩し、犠牲となるものは、既に述べてきたように、決して軍事活動に積極的に参加する人々ではなく、産業化、グローバル化、ドイツ軍によるギリシャ（クレタ）への空爆、英国の空爆、アメリカの空爆以来「市民」なのである。

「国家的戦闘能力」は時代遅れであり、金が膨大にかかり、嘘で塗り固められたものとなる。それらは「いいこと」は何一つもたらさず、その後の人生は悲劇的なものである（ベトナム戦争後の心理的に病むアメリカ兵を見ればよくわかる）。

目的は、「非武装化」である。「財政」、「構造」、「責任者」の定義の変更である。

多国が参加した多国による決定、例えば国連がそうである。「正常な状態」とは、様々の異なった国々、人々が今必要とされるものを明確にし、すべての当事者が参加して決めていくことである。「正常な状態」とは、また、時間的制約を設けた職権を持つ代表者の「選挙」である。「正常な状態」とは、「衝突に関しての学識経験者」が援助の手を差し伸べ、管理し、危険な場合はその衝突を隔離する。つまり、中立者による調停（仲介）、教育、健康管理、電気、水の供給、コミュニケーション（喧嘩の場合もある）の確保、資本主義の意味での儲けのない貸付、そしてそこで大事なものは、構造化された力（軍隊）としてではなく、支援グループ（「警察」）として事に当たること。

このために今欠けているものが三つある。「暴力がない時代」の分析と、対案提唱運動家（Alternativer）への財政的支出をどうしたらいいか、という点。兵隊は高くつくし、充分には教育を受けた助言者とはいえない。三つ目の欠落点は、正しい方向を示唆する「すばらしい」経験、体験の公表とその利用が欠落している、ということである。この講義の最初に触れた「インド（ガンディー）」、「南アフリカ（マンデラ）」の場合はむしろ例外である。多くの場合は、特殊な広がりを見ない専門誌でしか表に出てこない。“Neue Zürcher Zeitung”の2007年7月23日の第一面の記事「パレスティナの崩壊とチャンス」といったニュースがあることはあるが<sup>19</sup>。

産業化が進んだ国々や伝統的な中国におけるさまざまな活動を伴った地域的、内々のレベルでの仲介的体験をより広く知らせ、その質をより高かめることは、やってみる価値がある。「戦争がないが衝突が絶えない時代としての平和」が目指すものは、その内容においても、又その方法においても嘘をつくことがあってはならない。目的は「予防」であり、その原因に関係を持つことであり、互いの信頼を築き上げながら（「愛国」をいっているのではない）、

18 Albert Camus: Frage der Zeit (Essays), Rowohlt Verlag 1970, “Brief an einen Algerischen Aktivist”, 143ページ～

19 註15参照

そして「問題がまったくない領域（神の仲介）」とは結び付けられるのではなく（結局問題の核心が闇に葬られる）、一目瞭然のものでなくてはならない。

平和のシステムが構造上大事にするのは、「力」の分離（援助、支援、管理の分離）であり、時間的に限られた中での「力」、その「衝突」が関係する全ての人々がかかわること、自由な（強制を含まない）教育、情報公開、そして、諸条件から自由な管理の元での自由選挙、そこには少数派の保護があることはもちろんである。

そして最後に、既に精神病院の例を上げたが、我々がその「新しい国」に一步踏み入れるや数々の問題、辛苦が表れてくるということはいうまでもない。

それぞれ当事者が置かれている文化的状況に応じて、それに相応しい具体的作業が生まれてくる。例えば、1989年から90年にかけての二つのドイツの統一の際の「円卓」会議、あるいは、NGO（非政府組織）、国連の会議への出席、テレビやラジオのマスコミへの情報提供。

「円卓」会議、NGOは、我々が絶えずわかろうとし、又わかっていた事柄をなす方法であるばかりでなく、又今まで知られなかった「問」を生み出しもする。すなわち、「平和とは新しい国である」という問題を。

基本は日常生活のレベルである。自分は衝突とどう向き合っているのか、どうすれば、死ぬことがない、耐えられる結果を作り出せるのか、「今日、明日のここの」の問題である。

いろいろの国々の家族、学校、地域でよく知られた（衝突の）管理方法は、身体的暴力であり、信頼、安心を勝ち得るものから程遠いものである。ともかく相手に耳を貸さない、「全てか無か」の要求であり、考える時間も、その間（問題解決までの）の生きるための食料も与えない。

親、子ども、教師、隣人、警察、看護師、彼らのほとんどには、100%の解答を求めるのではなく、一方では寛容であり、他方では「完全なる勝利」のない限界の提示といった、衝突との構造的かかわりのための体験が欠けている。

今おかれている「不愉快な」毎日を、戦争なしに、100%の勝利といった錯誤もなしに、しかし「生きのびる」チャンスを持った展開へと進めるべき第一歩とは、原爆と無差別爆撃に対してNOをいうこと、強制労働、人身売買にNOをいうこと、より多くの人々に教育の門戸を開き、教育を受ける道を拡大し、健康と教育システムによって生きのびることを易しくすること、思いもつかなかった「問題」に対してオープンであること、そう、思いもしなかった問題、衝突に対して何の抵抗もなく目を向けることである。





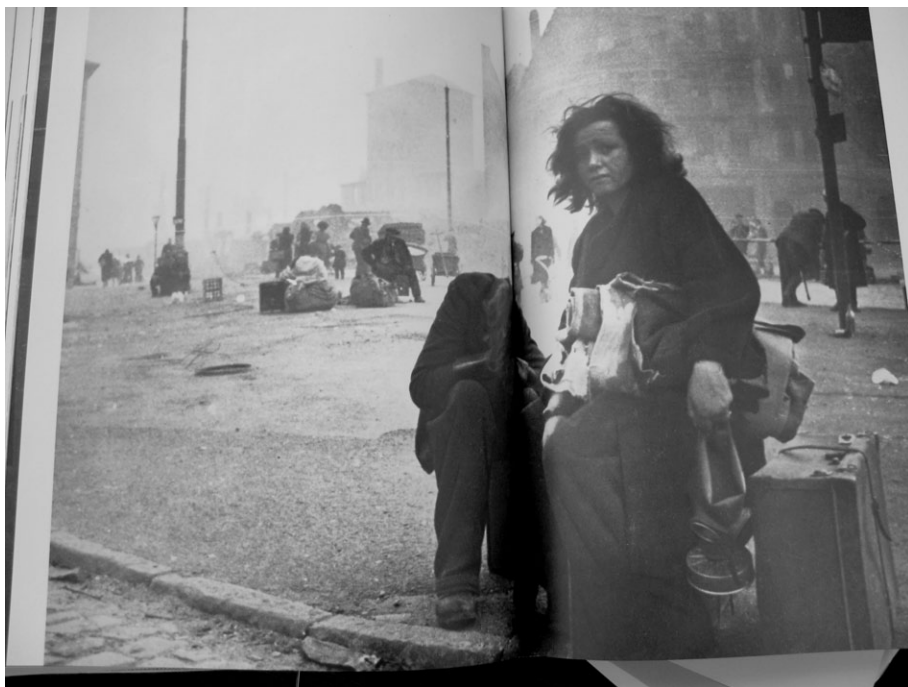


写真 5

写真 6

## ZIVILES LEBEN IM KRIEG

—wie ich zu dem Thema kam—  
(zur Zusammenfassung)

Stefan Mitzlaff

Mein Blick zurück: 1945 bin ich zwei Jahre alt, der Krieg ist zuende, der Vater kommt und bis 1955 kommen Verwandte und Freunde der Familie, Überlebende des Kriegs und des Holocausts zu uns.

Die Städte sind völlig zerbombt; ich sitze auf den Schultern meines Vaters und kann über die ganze Stadt sehen. Und die vielen Menschen ohne Familie, ohne Arm oder Bein.

Dann kommen die Kriege in Korea und Vietnam, und ich erlebe den Rassismus gegen die “Gelben” und die “Schwarzen” in Deutschland und den U.S.A. Und ich finde (1972) meinen japanischen Onkel, der noch nie in Japan war, in Honolulu/Hawaii/U.S.A.

Dann kommt die Militär- Diktatur in Griechenland, und wir betreuen Flüchtlinge von dort in Deutschland.

1995/96 machen der tschechische Künstler JIRI SOZANSKY (Prag) und ich im verbombten und verminten Sarajewo (Jugoslawien) ein Kulturprogramm mit und für übrig gebliebene Zivilisten. Und zwischen den Minen steht eine 85jährige Bäuerin und versucht, Tomaten zu ernten.

“Vergessen” scheint einfach zu sein. Aber es verhindert auch das fruchtbare Lernen auf den eigenen Füßen.

“Ziviles Leben im Krieg”: Eine “blinde Stelle” in vielen Zeitungen und Schulen und vielleicht ein Schlüssel zur Wanderausstellung Kassel (Deutschland) – Xi An (China) und Hiroshima (Japan) und zum Thema “Freiden ist konfliktreiche Zeit ohne Krieg”. Ein kleiner Schlüssel zum Weiter-Denken.

## 戦争の中の市民生活

——どうして私がこのテーマに行き着いたか——

(レジュメにかえて)

シュテファン・ミッツラフ (森島訳)

遡れば、1945年私は2歳であった。戦争が終わり、父親が戻ってきた。1955年までには、親戚、家族の友人、戦争、ホロコーストを生きのびた人たちが我々の元に戻ってきた（ミッツラフ氏自身ユダヤ系ドイツ人）。多くの町は完全に爆撃で破壊されていた。私は父親に肩車してもらいそこから町を見渡していた。多くの人々は、家族を失い、腕を失い足を失っていた。

その後、朝鮮戦争、ベトナム戦争が勃発した。私は、ドイツ、アメリカの、黄色人種、黒人への民族差別を体験する。そして、1972年、ホノルルで、まだ日本に行ったことがない日本人の叔父に会う。

それから、ギリシャに軍事独裁政権が起り、我々ドイツ人はそこからの難民の世話をする。

1995年から96年にかけて、チェコの芸術家ジリ・ソザンスキーと共に、爆撃され地雷が埋められたままのサライエボで、闘いを生きのびた人々のために文化的プログラムを実施した。埋められた地雷のど真ん中で85歳のおばあちゃんがトマトを栽培していた。

「忘れる」ということは簡単に思われるが、自分の足で、歴史から学んだ実りを「忘却」は台無しにする。「戦争と市民」、このテーマは、新聞、学校での盲点である。ひょっとすれば、カッセル、西安、広島とめぐる「移動展覧会」の中味を明らかにする鍵になるかも。「戦争がないが、衝突の耐えない時代としての平和」は、更なる思考のための小さなキーワード。